ネーム部門シナリオ②：恋愛

【登場人物】

**宮坂 紬（みやさか つむぎ）**：21歳。大学3年生。カフェでバイト中。本と静かな時間が好き。

**芹沢 透真（せりざわ とうま）**：28歳。会社員。落ち着いた雰囲気の大人の男性。

【シナリオ表記説明】

●●「」⇒声に出すセリフ

●●Ｍ「」⇒モノローグ

【シナリオ】

【シーン 1：夜道の出会い】

夜の商店街。静かで人通りは少ない。  
紬はバイト帰り、イヤフォンで音楽を聴きながら歩いている。

紬M「今日も疲れたな……。でも明日は休みだから、本屋に行こう。」

曲がり角を曲がった瞬間、オジサンが突然後ろから肩を掴んできた。

オジサン「ねえ、お姉さん、一人？」

オジサンは酔っ払っており、ニヤついている。

紬、息をのむ。  
紬「え？」

オジサンは強引に紬の腕を握る。

透真「彼女が迷惑しているのが分からないのか？」

透真が、オジサンの手をはがし、紬を自分の近くに引き寄せて守る。

透真は落ち着いた雰囲気だが、鋭い視線をオジサンに向けている。

オジサンは舌打ちし、気まずそうに去っていく。

紬、ほっと息をつき、イヤホンを外す。

紬「あ、ありがとうございます……！」

透真、軽く微笑む。  
透真「夜道は気をつけたほうがいいですよ。特に一人のときは。」

そう言い残し、透真は踵を返して去っていく。

紬は立ち尽くしながら、透真の後ろ姿を見つめる。

紬M「なんだろう、この感じ。」

紬、胸が妙にドキドキしているのを感じながら、その場を後にする。

【シーン 2：カフェでの再会】

翌日、紬はバイト先のカフェ「Luna Coffee」で働いている。

昼下がり、ドアのベルが鳴る。振り向いた紬の視線が、一人の客で止まる。

紬M「えっ!?」

そこにいたのは、昨夜のスーツの男、透真だった。

透真は店内を見渡し、カウンターに近づく。

透真「アメリカーノを。」

紬は一瞬動揺しながらも、なんとか平静を装って注文を受ける。

紬（小声で）「昨日はありがとうございました。」

透真は少し驚いたように紬を見つめる。

透真「君、昨日の…？」

紬は恥ずかしそうに頷く。

透真、くすっと微笑む。  
透真「世間は狭いな。」

アメリカーノを受け取った透真は、窓際の席へと向かう。

紬はドキドキしながら、彼が本を開く姿をちらりと見る。

紬M「まさか、こんな偶然ってあるんだ。」

【シーン 3：名前を知る瞬間】

閉店間際、店内は静かになり、透真はまだ席にいた。

紬は勇気を出して彼に声をかける。

紬「あの、おかわり、いかがですか？」

透真、少し考えて  
透真「じゃあ、カフェラテを。」

紬がカフェラテを淹れ、席まで持っていく。

紬「本、お好きなんですか？」

透真「ああ。仕事が忙しいから、こういう時間が貴重なんだ。」

紬は少し迷ってから聞く。

紬「あの……お名前、聞いてもいいですか？」

透真、少し意外そうな表情。  
透真「芹沢 透真。お姉さんは？」

紬「宮坂 紬です。」

透真は微笑みながら、カフェラテを一口飲む。

透真「いい名前ですね。」

その言葉に、紬の心臓が跳ねる。

【ラストシーン：未来の予感】

透真が店を出ると、外は月が綺麗だった。

紬はその後ろ姿を見送る。

紬M「透真さん、また来てくれるかな。」

窓の外に映る月と、まだ熱を持つカフェラテのカップ。

ここから始まる予感が、紬の胸を高鳴らせていた。